

各保育園におけるこれからの保育課程開発のための 園文化創造アドバイザーの支援に関する考察

横松 友義 ・ 渡邊 祐三*

各保育園のこれからの保育課程開発においては、保育士は、その園の保育士として、一貫性、体系性、組織性、計画性を保持しつつ保育を実践し、主体的に自らの保育と園の保育等を自己評価・改善することが、新たに重視されることになった。しかし、園の保育に一貫性、体系性等をもたらす、その自己評価の際の根拠になるはずの園の保育目標が、保育の実際から遊離している園が多いと言われる現状がある。この現状を解決する支援が、まずは必要である。本研究では、岡山市内の御南保育園が、園文化創造アドバイザーの支援を求め、本来の園の目標と保育の全体的構造を顕在化しつつ練り上げ確認した結果、前述の新たに重視されることになった事柄の実現が大きく期待できる、保育士集団の意識変化が生じたことを検証する。

Keywords : 保育課程開発, 園文化創造アドバイザー, 保育士集団, 園の目標, 保育の全体的構造

1. 各保育園が園文化の質的向上を目指す観点から これからの保育課程開発を進めることを支援する 園文化創造アドバイザー

保育とは、生命の保持と情緒の安定を図る「養護」と調和的発達を促す「教育」との一体化した働きかけと言われる。一般的に、この保育の各保育園¹⁾(保育所)における全体計画を保育課程と言い、各幼稚園における全体計画をカリキュラムと言う。本稿では、保育課程を構成し、指導計画に具体化し、保育実践を実施し、事実に基づいて省察し評価し、保育の計画と実践を改善していく一連の営みを、カリキュラム開発という用語と同様な意味で「開発」という用語を用い、「保育課程開発」と呼ぶ。

保育課程開発にかかわることとして、2008年の保育所保育指針の改定で、保育の全体計画を示す用語が「保育計画」から「保育課程」に改められた。それは、それまで以上に保育を質的に向上させるために、園の保育の一貫性、体系性、組織性、計画性

をより重視していることの表れである。²⁾そして、保育の内容等の自己評価において、園の保育士として主体的に自らの保育と園の保育等を自己評価・改善することが、新たに重視されることになった。³⁾つまり、保育士が、園の保育士として、一貫性、体系性、組織性、計画性を保持しつつ保育を実践し、主体的に自らの保育と園の保育等の自己評価・改善を推進していくことが、新たに重視されることになった。このことを踏まえれば、これからの保育園においては、必然的に、園内での意思統一がこれまで以上に求められ、各園内での共通の価値観とそれを反映した活動様式がより確立されていくことが重要になる。この状況の変化に適切に応じながら園の保育課程開発を進めようとする場合、まずは、各園の保育全体を、一定の人間集団での共通の価値観を反映した活動様式という意味での文化という観点からとらえ、文化の質的向上という観点から保育課程開発を進めていく必要があると考えられるのである。⁴⁾

岡山大学大学院教育学研究科発達支援学系 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

*岡山大学大学院教育学研究科修士課程

Adviser Support for the Creation of Preschool Culture: A Study for the Current Curriculum Development of Preschool Care and Education

Tomoyoshi YOKOMATSU and Yuzo WATANABE*

Division of Developmental Studies and Support, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushimana, Kita-ku, Okayama, 700-8530

* Graduate School of Education (Master's Course), Okayama University

各保育園が文化の質的向上という観点から保育課程開発を進めていくことは、保育実践研究をとおして進めていく必要があると考える。しかし、それ以前に、保育実践研究そのものが、その重要性が叫ばれているにもかかわらず、現在も十分になされていないと認識されている。⁵⁾

こうした状況の中では、園文化の質的向上という観点から保育課程開発を目指すことと、各園の保育士自身が保育の質的向上を目指す保育実践研究そのものを盛んにしていくことが、必要となる。この二つのことを実現するためには、第一筆者・横松がすでに示している次のような構想が有効であると考えられる。⁶⁾ この構想は、保育園と幼稚園の両方について述べているが、ここでは保育園に範囲を限定する。

保育実践研究では、一般的に、最初から保育実践そのものを研究対象とする。しかし、まずは、保育実践研究を始める前に、園文化全体の概要を顕在化する。ここで言う園文化全体とは、一定の歴史的背景の下でその園が共通の価値観に基づいて生み出しているすべての物事を指し、保育及び子育て支援の目標・計画・実践や研修・研究や設備・備品等を含んでいる。その上で、その中の保育に直接関わる部分を保育士集団が確認し、検討し、園の保育実践上の当面の課題を明らかにしていく。そうすれば、園の保育の一貫性、体系性、組織性、計画性は強まると共に、各保育士の課題意識が明確になると考えられる。園文化の質的向上を目指す方向性で、保育士集団はより主体的に保育課程開発を進めていくと考えられる。

次に、保育士が替わっていく現実を前提にした場合、優れた保育を求めることは当然であるが、第1に重視すべきことは、保育士が主体的に努力し、しかも、その努力を継続することであると考える。

さらに、園文化の質的向上を目指した保育課程開発への保育士集団の主体的な努力とその継続を促していく延長線上に、保育士の保育課程開発研究・保育実践研究が生まれてくることを目指す必要があると考える。なぜなら、保育士の目的意識は、一般的に、実践すること、それもより良い実践を生み出すことであり、研究すること自体、研究の質を上げること自体にはないと考えられるからである。進めていく保育課程開発について、保育士集団がより事実に基づいて考察し、より論理的に論じて、より発展させることを目指すことで、保育課程開発研究・保育実践研究が育っていくことが重要であると考えられる。

つまり、園の保育士集団は、園文化全体の概要を

顕在化し、その中の保育に直接関わる部分を確認し、検討し、当面の課題を明確にすると共に、主体的努力の継続こそが大切であると共通理解することで、自分たちの園文化の質的向上を目指した保育課程開発への主体性を大幅に強化することを目指す。そうして生じた保育士の主体的な保育課程開発の中から保育課程開発研究・保育実践研究が生まれ高度になっていくことを推進しようとしているわけである。

しかし、各園が園文化の質的向上を目指して保育の全体計画を改善していくという実践研究は、保育園の保育課程（保育計画）関係のみならず、幼稚園のカリキュラム関係においても見出すことはできなかった。

第一筆者・横松は、各保育園がこの見出すことができなかった新しい方向性の保育課程開発を開始し、最終的には、保育課程開発研究・保育実践研究を推進・充実するように支援する園文化創造アドバイザーという役割を提唱し、その確立を目指している。

II. 各保育園における園文化全体の概要のとりえ方とその理解の鍵になる部分

園文化創造アドバイザーは、まず、園の保育士集団と共に、園文化全体の概要を顕在化する必要がある。その際、園文化創造アドバイザーとして保持しておく必要があると考えられる視点全体を構造的にとらえてみたのが、図1である。この図は拙稿⁷⁾の図に、一部加筆・修正を加えたものである。

この図では、一番上に「人格完成へ至るための基礎に関する価値観」をあげている。それは、次の理由からである。我が国の教育の基本は、教育基本法に明示されている。教育基本法では、「教育の目的」として、「教育は、人格の完成を目指し」と述べられ、「幼児期の教育」について、「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである」と明示されている。つまり、幼児期の教育における基本は、幼児が人格完成へ至っていくことを目指し、その方向性で生涯にわたる人格形成をしていける基礎を培うことなのである。保育所保育指針に示されている教育の部分も幼稚園教育要領も、当然、このことを基本として踏まえた上で理解されなければならないことになる。そうしたことから、「人格完成へ至るための基礎に関する価値観」を第一に理解しておかなければならないこととして、一番上にあげている。その上で、園の「人格完成へ至るための基礎に関する価値観」と「保育に関する基本的価値観」と「保育・子育て支援の計画」と「保育・子育て支援の実践」と「職員の研修・研究」と「園の

歴史」との関係を示している。「園の歴史」は、現在を生み出している背景であり、また、これから創っていくものでもあるととらえている。筆者は、この図に示すとらえ方に沿って、園文化全体の概要を顕在化することを考えている。

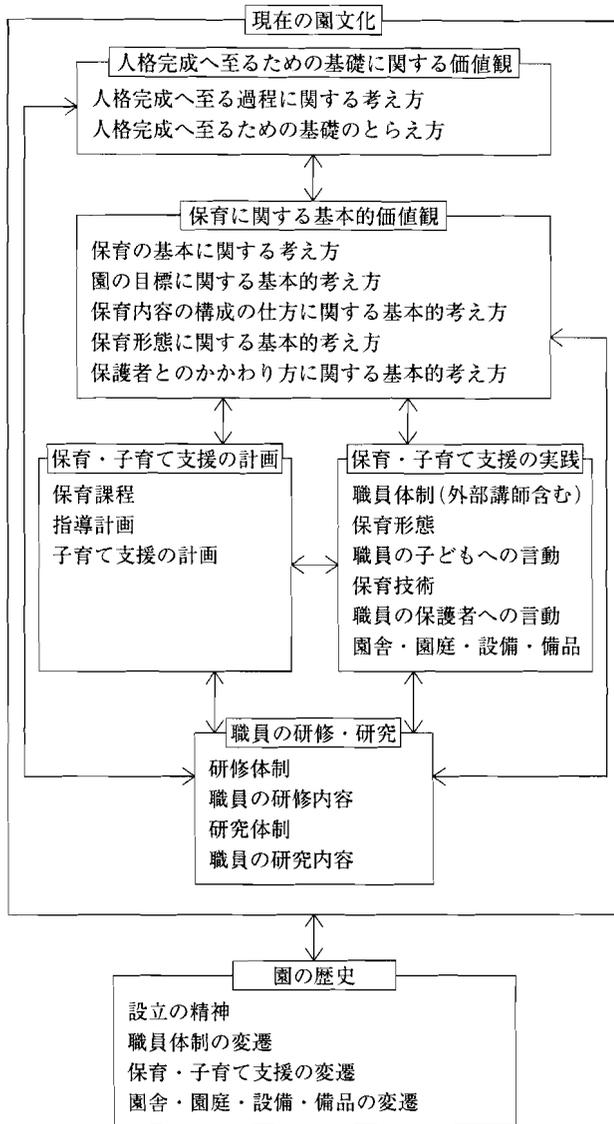


図1 各保育園における園文化全体の概要を顕在化する際に保持しておく必要があると考えられる視点とその構造的把握

ここで、新たに筆者らが注目しているのは、人格完成へ至る過程及び人格完成へ至るための基礎について、教育基本法には述べられていないという事実である。その理由については、ここでは問わない。それよりも、ここでは、事実として、この点について述べられていないことの保育関係者にとっての意味を考えたい。要は、我々保育関係者にとっては、人格完成へ至る過程及び人格完成へ至るための基礎については、「自ら」が追究し、その理解を深めていかなければならないということである。

ここでは、より分かりやすくするために、一つの

例を示す。第一筆者・横松は、現在、人格完成へ至る過程及び人格完成へ至るための基礎について、次のように理解している。

教育基本法は、生涯学習を理念としているので、教育の目的としての人格完成は老年期に実現すると想定する。そして、この人格完成を、一人ひとりの人間がもつ諸能力・諸特性を最大限かつ調和的に発展させるという一般的にとらえ方⁸⁾で理解した場合、こうした理想的人間は、人生の発達課題を当然達成しているし、これまで理想的な成熟の仕方として言われてきたことも当然達成しているであろうと想定する。これらの想定をまずは前提にした上で、これまでの自らの見聞や読書や人生経験を元にした現在の感じ方・考え方に基づいて、エリック・エリクソンとジョアン・エリクソンの発達課題の考え方⁹⁾と孔子の30歳から70歳にかけての自らの発達について語った言葉¹⁰⁾とを自分なりに解釈しながら、人格完成へ至る過程と人格完成へ至るための基礎について、次のように理解している。人格完成を達成する人は、誕生から順を追って、周りの世界への希望、意志、目的達成意識、有能感、所属集団に適応・貢献する力を得て、社会的に自立し、個人としての社会的安定を実現する。その上で、さらなる課題として、自分個人よりも家族など他人を大切にするために努力するようになり、その過程で、あらゆる場面で自らを安定させていけるような広範囲に通用する価値観を持つようになり、動じることが少なくなる。その後、体力・気力の衰えの中で、自らの分を自覚し、分に応じて生きることを学ぶ。さらに、自らの衰えを実感することを繰り返す中で、他への感謝や他に生かされている感覚を持つようになり、他人の話も受け入れることができるようになっていく。こうしたことがさらに洗練されてくると、自然に判断しても他人に迷惑をかけることが少なくなっていく。そして、この段階に至っても、自分の力で自分の生活を成り立たせようとする意識を持ち、美しい物やすばらしい物に感動して元気になり、自分の得た思いを表現したいという意欲を持っている。つまり、人格完成を達成する人においては、社会的に自立し安定するように成長することは十分に果たされており、その上で、壮年期から老年期にかけて、他人を大切にしようとする意識が強まっていくと共に、広範囲に通用する価値観を身につけていく。それと共に、衰えていく中で、自分の分に応じて生きるようになり、さらに、自分も他に生かされているという意識を持つようになり、他人を受け入れようとする意識を強めていく。その結果、日常生活の自立を意識しながら、自然体で自他共に大切にしてい

けるようになっていく。そして、その元気の源として、美しい物や素晴らしい物に感動し、表現したいと思う若々しい感性を持っている。こうした人間の姿は、知識面の能力・特性と情操面の能力・特性と体力面の能力・特性が最大限かつ調和的に発展した人間の姿として理解してもよいのではないかと考える。以上が、第一筆者・横松による人格完成へ至る過程についての理解例である。

人格完成へ至るための基礎については、周りの世界への希望と意志と目的達成意識が該当すると考えられるが、これらはすべて、保育園保育の基本として常に培うことが意識されていることである。そのことは、前提として、人格完成へ至るための基礎として、人格完成へ至る主体性を生み出す源になる、気力・体力を充実させる活動・習慣や美しい物・素晴らしい物に感動しそれを表現しようとする感性・意欲を重視していく必要があるのではないかと、また、広範囲に通用する価値観を身につけるための基礎として、少なくとも、自分の求めることと他人を大切にすることを両立させようとする意識を重視する必要があるのではないかと考えている。以上が、第一筆者・横松による人格完成へ至るための基礎についての理解例である。

この理解内容を仮に前提にした場合、保育園保育においては、5領域の目標を達成するというような漠然とした求め方でなく、前述の活動・習慣、感性・意欲、意識を誘発・形成したり培ったりしようとする明確な志向性が生じ、それに応じた保育目標や目指す子ども像が生まれてくると考えられるのである。つまり、5領域の目標をどのような考え方でとらえ、実際の保育においてどのように重視していくのが明確になってくるということである。

同様に、各保育士には、考えたことがないという場合も含めて、人格完成へ至る過程及び人格完成へ至るための基礎についての理解の広さと深さがあり、その理解内容がその保育士の保育目標についての判断に影響する。さらに、5領域の目標の具体化であるねらい、すなわち、豊かな、あるいは、前向きな心情、意欲、態度は、到達水準を持つものではないので、¹¹⁾このねらいを設定する段階に至っては、各保育士にたいへん大きな差が生じてくると考えられるのである。

また、人格完成へ至るための基礎が、生活の中で表れてくる基礎であるとするならば、それを全体としてとらえた場合、各園の理想とする人間が持つ基礎としての諸特性と言ってよい。この部分の考察が行われていればいるほど、園環境と保育全体から、その園の求めている理想とする人間像がより分かる

ようになると考えられる。このことは、後述する御南保育園の例からも示唆されることである。

こうしたことから、前述の図で言えば、一般的に保育士によく意識されている「保育の基本に関する考え方」の部分と共に、「人格完成へ至るための基礎のとらえ方」と「園の目標（保育目標及び保護者関係目標）に関する基本的考え方」が、園文化全体の概要を理解する上での鍵になると考えられるのである。

Ⅲ. 園文化全体について検討する前に解決しておかなければならない課題—保育士集団が保育の実際に対応した本来の園の目標と保育の全体的構造を顕在化しつつ練り上げる支援の不可欠な現状—

園文化全体の概要を顕在化し確認し、その中の諸部分について関係を踏まえながら検討し、当面の課題を明らかにしていく構想では、それら諸部分に一定の整合性があることを想定している。

しかし、現状では、この想定が保証されていないだけでなく、整合性をもたらす中心になるものが、機能していない園が多いと言われている。すなわち、保育目標が保育の実際から遊離して、園文化に一貫性、体系性、組織性、計画性をもたらす中心的価値観として機能していない園が多いと言われている。例えば、森上史朗・柏女霊峰編『保育用語辞典 [第4版]』（ミネルヴァ書房、2008年）では、若月が「園の保育目標」という項目で次のように述べている。「各園では園独自の保育目標を設定し、その実現のために日々保育を行っている。この保育目標は入園してくる保護者や教育課程や保育計画の根幹を示すものでなければならない。しかし、実際の保育現場では保育目標に掲げている目標は単なる飾りで、絵に描いたもちになっているような場合が多い。また保育目標と保育内容の大きなズレもあるので、具体的な保育にいかせる保育目標の設定が必要である。」¹²⁾この若月の言葉は、保育園と幼稚園の現場について述べたものであり、保育園も含めてのものである。

また、保育目標が中心的価値観として機能していない場合、目指す子ども像も中心的価値観として機能しない。必然的に、保育園の自己評価の諸視点を決める際の判断の根拠がないので、その諸視点を適切に決めることは困難になる。それにもかかわらず、その諸視点を無理に決めた場合、何が適切な評価や改善なのかよく分からないまま改善と言われることが進んでいく事態になるとか、統一性のない諸視点を無理に決めて保育に硬直性をもたらす事態にな

るとか、好ましからざる事態にならざるを得ないと考えられる。

このような場合、たとえ園文化全体の概要を明らかにしたとしても、統一性のない実態は明らかになるが、園文化を創造しようとする際の全体的な理解や評価・改善の判断根拠は不明といえる。創造を支援する際の根拠も不明といえる。

さらに、保育目標が中心的価値観として機能していない問題が放置されたままであった場合、一貫性、体系性等が保持できない問題だけではすまない。本来の園の保育目標といえるものでないものを安易に保育目標としていることが重大な問題であるという自覚がない園の場合、その傾向が強まることが予想される。自覚がある園の場合でも、保育の実際に対応した本来の園の保育目標を求める意識そのものが希薄化することが予想される。つまり、問題状況が固定化する危険性があるのである。これは、極めて重大な問題である。

園文化そのものを明らかにすることを最終目的にしている研究の場合は別であるが、筆者らの場合、園文化創造そのことを重視しているので、まずは、園文化創造支援の判断の根拠となるものを保育士集団と共に練り上げていくことこそ、最初に行わなければならないと考えるのである。

各保育園は、自分たちの園の保育目標を、少なくとも、教育基本法と保育所保育指針と整合性のあるものにしなければならない。しかし、同時に、各保育園は、実際の保育士集団の中で、実際の園の内外環境を踏まえて、教育基本法と保育所保育指針を解釈し、保育目標を練り上げなければならないはずである。多くの保育園が、このことを実現していくための支援こそ今まさに求められているのではないか。

また、2008年改定の保育所保育指針では、「今まで以上に保育の質の向上が求められ」、「保育所保育の全体的な構造を明確にすること」が目指されている。¹³⁾ここで明確にすることを求められている保育の全体的構造は、筆者らの考えでは、保育士がそれにとらわれて、子どもの活動を枠にはめてしまうようなものではなく、子どもに寄り添いつつ、例外を認めるくらい幅があるものであり、保育士集団が実際に合うように創り変えていくようなものである。¹⁴⁾そうした理解の上で、筆者らは、この保育の全体的構造を明確にすることが目指されるのは、保育の質的向上のために、園での保育全体の一貫性、体系性、組織性、計画性をより重視しようとする歴史的流れの中で、必然的なことであると考ええる。それにもかかわらず、保育目標が保育の実際から遊離している

場合、目指す子ども像も当然保育の実際から遊離し、園の保育全体に一貫性や体系性が生まれることは基本的に期待できず、保育の全体的構造など創りようがないといえる。例えば、「がんばる子」とか「考える子」とか「やさしい子」とか「ねばりづよい子」とかの保育園や幼稚園でよく見かける目指す子ども像がある。これらをそのまま提示するだけでは、実際の保育で育てることを目指している本当の子ども像は見えてこない。こうした子どもの像そのものを保育の実際に対応するように練り上げていくと共に、保育全体と関係づけることも重要になっていると考えられるのである。

園文化創造アドバイザーは、まずは、関係する園の保育士集団と共に、園の保育目標を顕在化しつつ、保育の実際から遊離せず、保育の実際に対応し、しかも、自分たちの納得できるものに練り上げ、さらに、園の保育の全体的構造を明確にするとともに、支援する必要があると考えられるのである。なお、その際、本研究では、保護者との関係が今日重視されている視点であるので、そのことを踏まえて、保護者関係も含めて、園の目標と保育の全体的構造を顕在化しつつ練り上げていく必要があると考える。

以上のことから、本研究では、園文化創造アドバイザーが、ある保育園の保育士集団と共に、園の目標（保育目標及び保護者関係目標）と保育の全体的構造を、保育の実際から遊離せず、しかも、納得できるものに顕在化しつつ練り上げた上で、保育士集団がそれらを確認することで、園の保育士として、一貫性、体系性、組織性、計画性を保持しつつ保育を実践し、主体的に自らの保育と園の保育等の自己評価・改善を推進していくという、これからの保育課程開発で新たに重視される部分の実現が大きく期待できることについて、事例研究をとおして検証する。

IV. 本来の園の目標を顕在化しつつ練り上げて確認することをとおして保育士に生じる意識変化に関する事例研究—これからの保育課程開発という観点からの分析・考察—

1. 方法

1) 対象園

岡山市内の御南保育園を研究対象とする。園名を公表することについては、園より了承されている。御南保育園と園文化創造アドバイザーである第一筆者・横松は、2007年4月から、独自で豊かな園文化創造を目指して保育課程開発（保育計画の開発）を進めていくために、協働している。御南保育園と協働するに至った経過は、次のとおりである。¹⁵⁾

平成14年4月1日に、岡山市初の幼・保一体型施設として、岡山市御南幼児教育センターが開園した。その中の御南幼稚園は学校法人虫明学園が、御南保育園は社会福祉法人橘会が、市からそれぞれ土地・建物を無償で借り受け、経営を委託されている。御南保育園は、橘今園での保育を基盤にして、岡山式カリキュラムの考え方に沿って保育を展開した。「岡山式カリキュラム」は、岡山市・岡山市教育委員会が平成13年6月に作成発表したものである。幼稚園教育要領と保育所保育指針を基本としながら、岡山市における人づくりの重点である「自然を愛し、人間を尊重する心豊かな子どもの育成」を目指して、幼稚園と保育園が積極的に交流を図り、幼児の発達に即して教育・保育を行っていくためのカリキュラムである。そのために、「保育目標」の内容も「子ども像」の内容も、当時の幼稚園教育要領や保育所保育指針をベースとしながら、幼稚園・保育園どちらも対応できる一般的で、ある程度の幅を持たせた抽象的なものとなっている。したがって、「目指す子ども像」を例にしても、「生き生きと活動する子ども」、「自分で考え生活する子ども」、「思いやりのある子ども」という言葉だけでは、経験の浅い保育士や外部の人間から見て、その園が本当に目指す保育思想や、具体的な活動内容を読み取ることは非常に困難であると考えられる。

園長となった渡邊和代は、開園を迎えるにあたって、橘今園での30年以上にも及ぶ保育士としての経験から次のような思いを抱いていた。「橘今園で積み重ねてきた伝統が、今では若い保育士にとって重荷になっているのではないか。」「伝統の生い立ちや歴史的背景、意味を正しく理解する間もなく、経験の浅い保育士が目標に向けての日々の実践に追われるようになってきている。」「時代の変化から親の保育園に対する意識やニーズも変化し、また園児を取り巻く家族や社会の子育て環境も変化してきている。」

そこで、彼女は、御南保育園開園を自身の保育の原点に立ち返る好機と捉え、0歳児からの発達に即した保育活動をもう一度探り直したいと考えた。乳幼児期に培うべき「人格形成の基礎」とは何か、乳幼児期に育てておかなければならない「身体」と「心情、意欲、態度」とは何か、年間を通して行われる様々な保育活動のねらいと発達の連続性との関連はどうか。こうした問いの積み重ねから、御南保育園独自の保育論・保育計画（今日の保育課程に対応）・保育実践を確立したいと考えた。その際に、園の保育の一貫性、体系性、組織性、計画性の重要性を意識し、園文化創造アドバイザーである第一筆者・横松と協働し、求める「園文化」を明確化する

ことから始めた。その理由としては、御南保育園の保育計画は、開園時より岡山式カリキュラムに沿ったものであったため、園長の保育にかける思いとの整合性が十分にとれていなかったからである。まずは、園長の保育にかける思いとその考え方を整理し、明確化し、保育士集団がそれらを確認し、検討した上で、岡山式カリキュラムの内容についての独自のとらえ方を明らかにすることにしたわけである。こうした意識をもつ御南保育園を研究対象とした。

2) 本来の園の目標を顕在化しつつ練り上げるための収集資料

園内での収集資料は、園の要覧、歴史に関する資料、指導計画、実践研究、実践記録（園の職員がデジタルカメラで撮影した写真を含む）、園便り、園文化創造アドバイザー・横松の観察記録、聞き取り内容である。これらと共に、「園の目標」を導き出し練り上げるための「人格完成へ至るための基礎」についての考え方を練り上げるための他の資料も収集した。その際、現在でも購入でき、一般によく知られていると考えられる物を選んだ。

3) 資料収集期間

2007年4月から2008年6月まで。なお、観察・聞き取り期間は、2008年1月から6月までで、月1回程度である。

4) 保育士への提示資料の確定手順

園文化創造アドバイザー・横松は、保育士集団が園の目標を顕在化しつつ練り上げていけるように、最初の試みとして、「人格完成へ至る過程」、「人格完成へ至るための基礎」とそれを培う上での「園の目標（保育目標及び保護者関係目標）」（この段階では「御南保育園が目指すもの」と表現している）とを提示資料の基本的内容とした。

「人格完成へ至る過程」と「人格完成へ至るための基礎」については、各保育士が園の目標を練り上げていく上で役立つと考えられ、かつ、よく知られているものを提示し、御南保育園の目標の背景としてとらえてよいか検討してもらおうことを考えた。そこでは、発達課題についてのエリック・エリクソンの考え方、30歳から70歳にかけての自らの発達について語った孔子の言葉、80歳代後半以降の発達課題についてのジョアン・エリクソンの考え方を取り上げ、該当部分あるいはその部分の解釈を提示した。これまでの読書・見聞と人生体験を積み重ねる中でこういうことであろうとつかんできた解釈を述べたのは、自ら生きてきた中でつかんできたとらえ方を提示したほうが、「人格完成へ至るための基礎」について、保育士集団と共に実感を持って議論ができて、園の目標に関する考え方をより練り上げるこ

とができると考えたからである。

「園の目標」については、収集資料内で次の条件を満たすものをあげた。育てることが必要であると何度も強調されている事がら。子どもに育てている力として強調されている力を育てる事がら。日常的に繰り返されている事がら。写真に記録されている事がら。

その上で、園文化創造アドバイザー・横松は、本来の園の目標を顕在化しつつ練り上げる上で必要な「人格完成へ至る過程」, 「人格完成へ至るための基礎」, 「園の目標」に関する作成資料を園長と副園長である第二筆者・渡邊に適切かどうか検討を依頼した。追加・修正についての助言をいただき、再検討・修正した。この作業を了承していただくまで繰り返し、最終的に、了承していただいた物を他の保育士への提示資料として確定した。

提示資料の作成方法上の厳密さについては、次のように考えた。この園では、園長の保育思想を中堅保育士を中心に継承し、検討し、発展させることがこれからの課題となっている。園長の思いこそ現在における本来の園の価値観といえるので、園長とその補佐役である副園長が妥当であると判断されることで、現在の本来の園の目標として妥当性が保証されたと考えた。

5) 保育士への資料提示の方法

保護者対象に横松がこの園の保育の本質（人格完成へ至るための基礎のとらえ方と園の目標）を説明する講演を約90分プロジェクターを使いながら行っていた。提示資料は、最初にその際に用いた。保護者対象ということもあり、親のあり方として述べた部分がわずかにあるが、それは周りの大人のあり方について述べたものである。この講演をビデオカメラで撮った。そして、その内容を2008年6月26日の職員会議で提示資料と共に職員に見ていただき、感想を出し合っていた。

6) 提示資料の内容

(1) 人格完成へ至る過程及び人格完成へ至るための基礎について

教育基本法の保育関係部分を概説した上で、御南保育園の保育における人格完成へ至る過程及び人格完成へ至るための基礎についての考え方として提示してよいものとして、上記の三者、エリック・エリクソン、孔子、ジョアン・エリクソンの見解の解説・解釈を示した。

まず、エリック・エリクソンの発達課題¹⁶⁾については、保育者の視点からの津守真のとらえ方¹⁷⁾が理解しやすくと考えて、それを解説した。生涯発達の過程で身につけていく徳（「社会と個人を支え

る、生命性をもった精神の力」) についての津守のとらえ方は次のとおりと考えられる。希望（乳児期）→意志（幼児前期）→目的意識（幼児後期）→有能性（児童期）→所属集団への忠誠（青年前期）→愛（青年後期）→育てる（壮年期）→知恵（老年期）。

次に、30歳から70歳にかけての自らの発達を語った孔子の言葉¹⁸⁾ についての解釈を述べた。これは、津守のとらえ方と関連づけると、「育てる」徳を身につける段階から「知恵」の徳を身につけていく段階までにだいたい対応すると考えられるものである。社会的に自立する→かなり普遍的なものを身につけ、平常心で生きることができ→状況の求めを理解し、分に応じて役割を果たすことができる→人の話が聞ける→思うままに行動していきすぎがない。最終的には、自分にも相手にも無理がなく、相手と和をもてる生き方になる。

最後に、80歳代後半以降に、「絶望」ではなく「知恵」に至るために必要な生き方や特性に関するジョアン・エリクソンの考え方¹⁹⁾ を解釈し整理し、それと共に、その必要な生き方・特性を実現するために保育上大切と考えられることについて論じた。

① 心身の健康を維持する。(自分の健康管理ができ、体力・気力のある人間に育てる。) ② できるだけ他に依存せず、他に与えることを生き方の基本にする。(自分で自分の健全な生活を作り、他のための活動をする人間に育てる。周りの大人がそうした生き方をしておく。) ③ 謙虚さ。(他に生かされている感覚、他に気づかせていただいているという感覚[感謝につながる感覚]を育てる。周りの大人がそうした感覚を持って生きていく。) ④ 美しい物への感性とそれを表現しようとする心。(美しい物や素晴らしい物や驚くような物に心を動かす感性を育てる。それを表現する人に育てる。)

(2) 園の目標

続いて、御南保育園の目標について解説した。本研究では、補足説明として、各目標の【 】内に、目標達成のための実践を紹介した写真あるいは実践例について述べている。また、園の目標のイ)からロ)までは、ジョアン・エリクソンが必要な生き方・特性としてあげていると考えられる①~④に対応すると考えると口述したことも追記しておく。

イ) 表現しきれぬ体力・気力を育てる。【縄跳び・鉄棒場面の写真。年下の子どもたちが年上の子どもたちの姿を見る保育形態にしており、あこがれを抱く。】

ロ) 自分で自分の生活を営んでいく力をつける。(生活リズムが整っている、生活習慣を獲得している、遊び・活動の後に片づけ・掃除ができ

る、1日を見通して生活することができるように育てる。)【掃除場面の写真。】

- h) 他を応援する、年下の子のために仕事をする子に育てる。【鉄棒中の応援場面、年上の子が年下の子の給食を準備する場面の写真。】
- こ) 「いただきます」の心を育てる。【給食時の合掌場面の写真。】
- か) 自然のサイクルや自然に生かされている感覚を育てる。【米のできるサイクルに子どもたちがかかわっている写真。レンゲの種や土壌改良材をまくところから稲を育てていく過程に触れることを経て、脱穀やおにぎりにして食べるところに至るまでの写真。】
- き) 美しい自然、すばらしい自然、自然の中での驚きを感じる感性(センス・オブ・ワンダー)を育てる。【1年間に子どもたちが触れている数多くの自然を示す写真。】
- く) 感動したものを表現する心を育てる。【0歳から歌の楽しさや心情を感じながら歌う実践を積み重ねた上で、5歳組の時に、自分自身が自然から感じたものが歌の歌詞と結びつき、自然にその歌を歌い出し合唱になった。】
- け) 保護者の方々と共に子どもたちを育てたい。【園外保育で、ダイビング・インストラクターの保護者の方や自然・登山に関する知識を持つ保護者の方に力をお借りしている。保育内容を夕方までに、遅くとも次の朝までに、掲示板でお知らせしている。】

7) 保育士に対する保育課程開発にかかわる調査の実施

6月26日にビデオを見ていただいた後に、「①園の保育についての理解が深まったか」、「②今後の保育についてどう考えるか」を問う自由記述の質問紙調査を副園長である第二筆者・渡邊が実施した。最初の試みとして、対象は、提示資料の作成に直接関わった園長及び副園長を除いた、2年目以上の正規職員の保育士16名とした。1年目の職員は状況がほとんど分からないので対象としなかった。2～3日中に、書式は任意で、A4用紙1枚で提出を依頼した。なお、園内研修に近い形を取ったため、氏名は記入されている。

2. 結果と考察

まず、園の保育課程開発に影響を与えると考えられる記述内容に注目し、同様なテーマごとに分類し、その一まとまりごとに要約的な概念をつけた。ここでは、その中で、記述が複数のものについて、記述者数と記述例を述べた上で考察する。

1) 園の目標についての認識強化と理解深化

16名全員。園の目標やその根底にあるものについて、分かったり、改めて気づいたり、実感したり、再確認したり、あるいは、理解が深まったりしたことが記述されている。(記述例)「1年目、2年目に感じていた“御南保育園の保育はすごい”という思いが、年数を重ねるごとに当たり前のように感じはじめたことに気づかされ、自分の行っている保育の根底には何があるのか再認識できた。」この記述のように、園の目標やその根底にあるものについてより明確に認識したりより深く理解したりすることで、保育士集団の共通理解は強化される。このことは、園の保育の一貫性を強化することになると考えられる。

2) 園の保育の推進

12名。御南保育園の目標に沿った保育実践を進めたいという記述がある。(記述例)「自然、自然といっても、年齢によって感じ方や体験の範囲や取り入れ方なども変わってきます。自分自身が機会を逃すことなく、それぞれの年齢にあった接し方で、子どもの心にすーっと入っていくような言葉でしっかり伝えていきたいな、と思いました。そして、みんな家族という思いで、園全体で子ども達の豊かな感性を育てていけたらいいな、と思います。」主体的に園の保育を推進していこうとする意識が述べられている。

3) 自己向上への意欲

8名。(記述例)「自分自身も小さな自然の変化に気付いたり雄大な自然を感じたりしながら保育者として、人として自分を磨いていけたらと思います。」保育実践の向上に結実する努力への意欲が述べられている。

4) すばらしさの実感、誇り、自信、幸せ、感謝

6名。(記述例)「普通に当たり前のこととして行っている保育に、体力、気力、謙虚さ、感性を育てることが含まれていることを…改めて気づき、誇りに感じると同時に自信にもつながりました。」園の保育についての理解がよりはっきりしたり深まったりすることで、自らにプラスの感情が生じている。園の保育課程開発への主体性を促すものになると考えられる。

5) 努力は報われるという信念

3名。(記述例)「自分の80後半以降の絶望は…まだ考えられず、今何もできない自分で必死です。でも、自分がした悪いことも頑張ったこともそれだけ返ってくるのだと思います。」自らの努力を継続できる支えとなる信念が示されている。

6) 仕事の重大さの自覚

2名。(記述例)「自分自身の責任の重さをひしひしと感じさせられ、正直、重たくも感じられる。」この記述は、重大さを実感することで、プレッシャーを感じた例である。自分のペースでよいとか努力は報われるとかのアドバイスで、プラスに転換できる例であると考えられる。

7) 総括

以上のことは、これからの保育課程開発に新たに求められていること、すなわち、園の保育士として、一貫性、体系性、組織性、計画性を保持しつつ保育を実践し、主体的に自らの保育と園の保育等の自己評価・改善を推進し、園の保育を質的に向上させることという観点からみると、次のように総括できる。園の目標(保育目標及び保護者関係目標)やその根底にあるものについての各保育士の認識が強化されたり、理解が深まったりし、共通理解が強化され、園の保育を推進しようとする意識も強まり、園の保育の一貫性が強化される可能性が高まっている。自分たちの自信、誇りや幸せ感、感謝が強まり、園の保育士としての主体性が強まる可能性が高まっている。自己向上を目指す意識が生じている。園の保育の質的向上が期待できる。保育の実際に対応した園の目標を顕在化しながら練り上げ、確認できたことで、園の目標についての共通理解と園の保育の一貫性と園の保育士として保育を推進する主体性が強まり、自己向上への意識も加わり、園の保育の質的向上が期待できる、保育士集団の意識変化が生じているといえるのである。

V. 本来の園の保育の全体的構造を顕在化しつつ練り上げ確認することをとおして保育士に生じる意識変化に関する事例研究—こらからの保育課程開発という観点からの分析・考察—

1. 方法

1) 対象園

岡山市内の御南保育園を研究対象とする。

2) 本来の園の保育の全体的構造を顕在化しつつ練り上げるための収集資料

IVの事例研究と同様である。

3) 資料収集期間

2007年4月から2008年9月まで。なお、観察・聞き取り期間は、2008年1月から9月までで、月1回程度である。

4) 保育士への提示資料の確定手順

園文化創造アドバイザー・横松は、前回御南保育園独自の園の目標(保育目標及び保護者関係目標。ただし、この段階では、「保育の中心的課題」と表現している)を確認していただいたので、この度は、

園の保育の全体的構造(この段階では「保育原理」と表現している)を顕在化しつつ練り上げ、保育士集団に確認していただくことを目指し、さらに、「保育の基本に関する考え方」、「保育内容の構成の仕方に関する基本的考え方」、「保育形態に関する基本的考え方」、「保護者とのかかわり方に関する基本的考え方」を練り上げた。その際、保育目標から「目指す子ども像」も明らかにできると考え、それも加えた。また、園における保育の全体的構造の評価に関する横松の考察も加えた。なお、園の目標についての記述は、より適切なものにするため、前回のもを一部修正した。なお、今回は、保育に直接関係することに内容を絞りを、「人格完成へ至るための基礎に関する価値観」は除外した。

顕在化しつつ練り上げる方法については、園文化創造アドバイザー・横松が収集資料内の今回のテーマに関係する部分から記述内容を構成し、その上で、IVの事例研究の場合と同様の考え方で、内容については、園長と副園長である第二筆者・渡邊に適切かどうか検討を依頼し、最終的に了承していただいた物を他の保育士への提示資料として確定した。

5) 保育士への資料提示の方法

園の保育の全体的構造について述べた提示資料を開始10分ほど前に読んでいただいた。これは、解説がより頭に入りやすいようにという園内からの配慮による。その上で、横松が口頭で約50分解説した。なお、解説前に4カ所修正と加筆を依頼した。実施日は、2008年10月16日である。

6) 提示資料の内容

御南保育園の保育の全体的構造をそのまま文章化し、また、プロジェクターは使わず、口頭のみで解説したので、ここでは、記述内容をそのまま示す。なお(※……)部分は、本研究で補足説明するために追記したものである。

(1) 保育の基本

保育園は、家庭に代わる場である。すべての保育士は、すべての子どもに愛情を注ぎ、くつろげ、伸び伸びとできる家庭的な雰囲気を創る必要がある。その中で、保育士は、子どもの思いを十分に受けとめ、満たしていく。また、子どもと共に活動し、良きモデルになる。

その中で、保育所保育指針の養護と教育の目標を達成していく。

(2) 保育の中心的課題(※園の目標)

イ) 表現しきれぬ体力・気力を育てる。

ロ) 自分で考えて生活を創っていく力をつける。

ハ) 他を応援する、年下の子のために仕事をする子に育てる。

- ニ) 「ありがとう」の気持ちを育てる。
 - ホ) 自然のサイクルの実感や自然に生かされている感覚を育てる。
 - ハ) 自然の中で美しさやすばらしさや不思議さに感動したり心を動かしたりする感性（センス・オブ・ワンダー）を育てる。
 - ト) 感動したものを表現する心を育てる。
 - フ) 保護者の方々と共に子どもたちを育てたい。
- これらは、人格完成（高度で調和的な人格）へ至るための基礎を培う上での中心的課題（※園の目標）である。

（3）目指す子ども像

御南保育園の目指す子ども像は、保育の中心的課題（※園の目標）から導き出せ、次のように表現できる。生きていく基礎としての気力・体力が備わっている。そして、自分で考えて生活を創ろうとする姿勢を持ち、その中で、自らを表現しようとする。こうしたことを豊かに実現できるエネルギーをもたらすものとして、人間は生かし合っている、自然に生かされているという実感や信頼感を持っている。また、自然のすばらしさに感動したり自然の不思議さに心を動かしたりする中で、自然から強いエネルギーをもらえる感性を持っている。こうした性質を持つ子どもが目指す子ども像といえる。

（4）保育内容の構成の仕方〔主に（※園の目標の）イ）、ロ）、ホ）、ハ）、ト）と関係する〕

養護面では、生命の保持及び情緒の安定を図ることを常に意識しておく。教育面では、一日の最初に、縄跳びや鉄棒などで体力・気力の充実と心の満足及び身体の安定を図る。このことをみんなで行うことで、園生活を始めることのできる覚醒状態になり、一体感を持てると共に、長期的に見ても、力強く安定した身体を育てることになる。朝の活動の後、0歳児クラスから、それぞれ朝の会を行う。朝の活動で日光や風などの自然を肌で感じている。その上で、その季節の自然物やその時期の社会の出来事を取り上げ話し合っ、興味・関心や発想を広げていく。そして、その日一日の流れについて前日までの活動を考えながらどういうことを行っていくかを決めて、一体感を持って生活に臨む。こうした朝の会は、年長に至るほど、より多くの発言が期待でき、生活も主体的に計画されていく。朝の会の後には歌を歌い、歌に込められた大切な心情をとらえ、表現して、その大切な心情の中に浸り、心地よさを実感していく。3歳未満児については、朝の会の後以外にも頻繁に歌を歌う。その後の1日においては、自然とのかかわりの中でセンス・オブ・ワンダーの感覚を豊かにし、これらを子どもの遊び・表現の基礎と考え、

生じてくる子どもの思いを受けとめ、十分に自己を実現していくことを基本的考え方とする。その積み重ねの中で、子どもたちは自然のサイクルを実感していく。また、自然に生かされている感覚も培っていく。1日の中では、読書の時間を設けて、静かに集中することを重視する。0歳児クラスより、それぞれ午後のクラス会（午後3時半以降の自由活動の前、5～15分程度）で、1日の生活を振り返り、明日への期待につなげていく。この午後のクラス会では、朝の会と同様に、自分で考えて生活を創っていく力とクラスの一体感を培っていく（※こと）が重視される。以上からの体力・気力の充実や心身の安定や子どもたちの一体感を前提とした上で、言葉のやりとりや人間関係の育ちは保障される。

（5）保育形態〔主に（※園の目標の）ハ）、ニ）と関係する〕

年齢ごとにクラスを編成し、保育をしているが、年下の子どもが年上の子どもや保育士等の姿を見て憧れや目標の明確化ができるように、また、年上の子どもが年下の子どもの生活を整えたり、子ども同士で応援し合ったりできるように、異年齢交流のできる形態の確保を重視する。

（6）保護者とかかわり方〔主に（※園の目標の）フ）と関係する〕

保護者の方と共に子どもを育てていくことを目指す。園便りや掲示板で園の保育のことをできる限り早くお伝えする。また、自分たちの懸命な保育を見ていただいて、保育者たちの子どもたちへの思いをお伝えする。加えて、行事で子どもを見ていただいたり、子どもとの触れ合いを大切にしたりすることを通して、子育てのやる気を引き出していく。そうして、保護者の方と共に子どもを育てていくことを実現したい。

（7）園文化の中核としての保育原理（※保育の全体的構造）の評価に関する筆者（※園文化創造アドバイザー・横松）の考察

園長を中心に、人格完成へ至るための基礎についての考え方が、形成されてきており、その内容は、ジョアン・エリクソンの考え方にほぼ対応することが偶然確認された。

他方、子どもたちのたくましさ（体つき、体力、物怖じしない心）は一般的な園の子どもたちよりも優れていると筆者（※園文化創造アドバイザー・横松）は実感する。この園では、開園から7年目に入るが、市の保育課に保護者からの苦情があったことは一度もないという。保護者から園の決定に苦情を言われたこともなく、協力的であるという。例えば、平日、5歳児クラス約30名が登山をするとき、6

名の父親が参加し、援助して下さるような状況である。

この二つのことは、関連しているのではないかと筆者（※横松）には思われる。園の保育原理（※保育の全体的構造）は、人格完成へ至っていく人間になるための基礎を培うことを志向したものであり、その実践が現実に進められている。その中で、高度で調和的な人格へと完成されていく過程で生じることが予想される、穏やかさ、喜びの得やすさ、不平不満の生じにくさが、園内に生まれているのではないかと考えられる。そうしたことが、子どもや保護者に好影響を与えているのではないか。なお、この園では、一般的な園よりも、保育士が辞めないという。保育士の方々も、この園の保育の向上を目指す中で、自らの人格形成に関して示唆を得ることが多いのではないかと考えられる。

7) 保育士に対する保育課程開発にかかわる調査の実施

園文化創造アドバイザーである第一筆者・横松が園の保育の全体的構造について口頭で解説した後、各保育士に「①今日の話聞いて、どんなことをお考えになりましたか。」「②園の保育について理解は深まりましたか。」「③これからの自分の保育についてどう考えますか。」と問う自由記述の質問紙調査を実施した。無記名であるが、参考情報として経験年数を記入していただいた。

対象は、提示資料の作成に直接かかわった園長及び副園長を除いた、すべての保育士22名（保育にかかわり、行政上も保育士と位置づいている看護師1名を含む）である。実施時には、これから、以上の内容について検討をする予定でもあり、率直に書いてほしいと依頼した。

2. 結果と考察

Ⅳの事例研究と同様の手順で、同様なテーマの一まとめりに要約的な概念をつけた。ここでは、その中で、記述数が複数のものについて、記述者数と記述例を述べた上で考察する。なお、園の了承を得て、明らかな誤字は訂正している。

1) 園の保育の全体的構造についての認識強化と理解深化

1名「ある程度わかっているつもりである」と記述されている以外は、21名共、園の保育の全体的構造について、改めて実感したり、再確認したり、あるいは、理解が深まったり、分かたりしたことが記述されている。（記述例）「日々、保育をしていることを〈園の特徴〉＝中心的課題として具体的にお話ししてもらい、私自身はもちろんのこと経験の浅い職員も自分達がしていることや、先輩達がなぜ

しているかということが理解できたのではないかと感じた。」この度は、より具体的に、しかも、理論と実践との関連を示しながら保育の全体像を解説したことで、分かりやすかったとか一つ一つのこの意味が分かったとかと記述される傾向が見られた。保育士集団の共通理解が大幅に強化されたと考えられる。

2) 園の保育の推進

19名。御南保育園の保育の全体的構造に沿った保育実践を進めたいという記述がある。この度は、その中に、後輩たちを導いていきたいとか、周りに園の文化を広げていきたいとかの記述を見出すことができる。（記述例①）「今まで培ってきた自分自身の力は本物なのだ」と心に置き、自分自身を更に高めていくと共に、若い職員へどう伝えて、理解してもらおうかが課題でもあります。……私自身の保育をしっかり示すことが、刺激にもなるのではと思います。また、遠慮せず、伝えるべき事は伝えるというプロ意識をもち、共に向上できたら素晴らしいのでは…と感じています。（記述例②）「日々の保育は、まさにそのとおりだと思う。これは、保育園の保育だけでなく、私たちの毎日の生活そのものの基本であると思う。決して難しいことではないはず…私たちが子どもの頃は、まだ自然のうちに身につけてきていたように思う。（全てではないが…）」「それが今になってだんだんくずれそうになってくる。一人だけが（一つの園だけが）頑張ってもダメ…幼、小、中、地域全体の意識を高めていくことが必要！！」「園独自の文化が社会全体の文化になれば、素晴らしいことだと思う。」「どうにかして、地域に発信していきたい。」園全体の向上、園文化の広がりに向かっての記述を見出すことができる。

3) 自己向上への意欲

11名。（記述例）「最後の一文に『この園の保育の向上を目指す中で、自らの人格形成に関して示唆を得ることが多いのではないかと』とあるが、私はこの文章を読んだ時、大きく頷かずにはいられませんでした。私自身が本当にそうだったからです。自分なりに取り組んでいくうちに色々な方達に助けられ子ども達に教えられ成長させてもらえたな、と改めて感じました。それと同時にもっとスキルを高めていきたい、と強く思いました。」保育実践の向上への意欲が明確に示されている。

4) すばらしさの実感、誇り、自信、幸せ、感謝

11名。（記述例）「今まで、特別なことをしてきたという実感はあまりありませんが、実は今までの保育一つ一つに意味があるものであったのだと嬉しくもあり、自信にもつながりました。」こうした記

述内容は、園の保育士としての主体性を強めるものになると考えられる。

5) 力不足の実感、能力への不安

8名。(記述例)「理解が深まったと言えば、そうである。まだ、中心的課題と子ども像への理解が浅い。特に自然への自身の考え方、とらえ方が浅いと感じるので、そういった点でこれから理解して文章化したり、実践に移したりしていかなくてはならないと感じる。」こうした記述は、園の一つ一つの保育についての理解が深まったからこそ生じるといえる。今後の保育の質的向上をもたらすきっかけになることとして理解することができる。

6) 仕事の重大さの自覚

3名。(記述例)「日々の取り組みが子どもの成長に大きな影響を与えていると感じ、改めて責任のある仕事だと思った。」一つ一つの保育の意味の深さを理解することで、その仕事の重大さが意識されたと考えられる。

7) 落ち着いた保育の大切さの再確認

2名。(記述例①)「しっかりと大地に足をつけて一日一日を大切に、着実に過ごせるようにしたいです。自分の心、体の安定が、保育の安定、発展につながると思います。」(記述例②)「園の目指す子ども像を大切にすることは、もちろんなのですが、『あれをやった』『これをやった』という結果だけが一人歩きし、無理に当てはめようとするものがないように気を付けていきたいと思いました。目の前にいる子どもの姿や思いに寄り添いながら、保育活動を展開していき、その過程を大切にしたいと思いました。」一般に、積極性が強まる時、冷静さが必要となる。その冷静さが生じている例といえる。

8) 先輩への敬意

2名。(記述例)「先輩がみんなそれぞれの色で素敵ですばらしく、かけ離れすぎていて気落ちする事も多いですが、毎日自分にプラスがいっぱいです。」こうした記述は、先輩がすばらしく、学ぶことができるという文脈で述べられている。

9) 総括

以上のことは、これからの保育課程開発に新たに求められていること、すなわち、園の保育士として、一貫性、体系性、組織性、計画性を保持しつつ保育を実践し、主体的に自らの保育と園の保育等の自己評価・改善を推進し、園の保育を質的に向上させることという観点からみると、次のように総括できる。園の保育の全体的構造を具体的な実践と関係づけて確認することによって、園の保育の一つ一つがより理解され、共通理解が広がり深まっているといえる。園の保育の推進がより全体的により大きな視点で考

えられるようになっている。園の保育の一貫性と共に、体系性、組織性、計画性が強まる具体的な理解が進み、園の保育を推進していく意欲が強まっている。自分たちの誇りや自信などもより強化されて、園の保育士としての主体性が強まる可能性が高まっている。自己向上を目指す意識と共に力不足の実感も生じてきている。園の保育の質的向上が大きく期待できる。今回の調査では、さらに、仕事の重大さの自覚や落ち着いた保育の大切さの再確認や先輩への敬意が、表れてきている。保育の実際に対応した園の保育の全体的構造を顕在化しながら練り上げ、確認できたことで、園の保育の一つ一つの意味が理解できてきて、園の保育の一貫性、体系性、組織性、計画性と園の保育士として保育を推進する主体性が強化され、自己向上への意欲が強まり、園の保育の質的向上が大きく期待できる、保育士集団の意識変化が生じているといえるのである。

VI. これからの保育課程開発という観点からの保育士に生じた意識変化に関する総括的考察と今後の課題

これからの保育課程開発においては、保育士が、園の保育士として、一貫性、体系性、組織性、計画性を保持しながら保育を実践し、主体的に自らの保育と園の保育等の自己評価・改善を推進し、園の保育の質的向上を目指す必要がある。筆者らは、そのことをかなり高いレベルで実現するための第一の条件は、園の目標と園の保育の全体的構造を、保育の実際に対応し、かつ、保育士集団が納得できるものに顕在化しつつ練り上げ、保育士集団が共通理解を深めることであると考えている。本研究では、第一筆者の横松が、園文化創造アドバイザーとして、第二著者の渡邊が所属する御南保育園と共に、本来の園の目標と本来の園の保育の全体的構造(人格完成へ至るための基礎、保育の基本、園の目標[保育目標及び保護者関係目標]、目指す子ども像、保育内容、保育形態、保護者へのかかわり方についての基本的考え方)を顕在化しつつ練り上げて、それらの評価に関する筆者の考察と共に保育士集団に確認していただいた。その結果、保育士集団に、園の保育の一つ一つの意味がより深く理解され、園の保育をより力強く創造したり、より大きく打ち出したりしようとする意識が生じ、園の保育についての誇りや自信などが強化され、自己向上への意欲が生じている。つまり、これからの保育課程開発に新たに求められている、園の保育士として一貫性、体系性、組織性、計画性を保持しながら保育を実践し、主体的に自らの保育と園の保育等の自己評価・改善を推進

し、園の保育の質的向上を目指していくことが大きく期待できる、保育士集団の意識変化が生じているといえるのである。

本研究は、一園の事例による研究であるが、本研究から示唆される次の結論は一般化できる可能性は十分にあると考える。園文化創造アドバイザーが、各園の保育士集団と共に、保育の実際に対応した納得できる園の目標を初めとする保育の全体的構造を顕在化しつつ練り上げ、保育士集団がそれらとその根底にあるものについて理解を深めたとき、保育士集団が、園の保育実践を積極的に自信を持って進め、主体的に自らの保育と園の保育等の自己評価・改善を推進する基礎的条件が整うことになる。仮に、このことを前提にすれば、各保育園は、今まさに、園の目標が十分に考えられることなく安易に決められていないか、保育の実際から遊離していないか、また、園の保育の全体的構造が十分に考えられ練り上げられているかを、他の支援を受けてでも確認することから始めなければならないことになる。

筆者らは、これから、御南保育園の保育士集団と共に、練り上げた保育の全体的構造を踏まえて、保育課程開発（デイリープログラム、具体的保育実践、指導計画作成のプロセス等）を事実に基づいて研究的に点検する予定である。その中で、保育課程開発上の課題を明確にできると考えている。その課題との関係で、研修・研究上の課題も考察していく予定である。その過程で、保育士集団で共通理解を図り、協議し、当面の課題を決めていくことが適切ではないかと考えている。

園文化創造そのことを重視する本研究においては、まずは、これからの保育園保育に新たに求められていることを実現するために、園文化全体を一貫性のあるものに創造してみることから始めたい。園文化全体の概要を顕在化し、課題を導き出す方法は、その後用いることが現実的であると考えられる。

御南保育園を事例として、その園の保育の全体的構造にあったより豊かな保育課程開発及び保育課程開発研究を推進し、それを踏まえて、研究、研修等のその他の園文化の質的向上を目指すことが必要である。その一つ一つを進め、その進め方について検討を積み重ねていくことが、今後の課題である。

注

- 1) 筆者らが日常的に関係している保育所は、公的に〇〇保育園という名称を使っておられるので、そのことを尊重し、本研究では保育園という名称を用いる。
- 2) 厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレーベ

- ル館，2008年，125-126ページ。
- 3) 同上書，148-153ページ。
- 4) この考え方を最初に提唱したのは、大場幸夫（『保育所保育指針の改定について～2007.9.15：NPO保育総合研究所：総会〈報告〉より～』『保育の実践と研究』Vol.12 No.3，2007年，10-11ページ）であると考えられる。
- 5) 例えば、日本保育学会では、『保育学研究』に保育実践をテーマにした論文が少ない状況を改善するために、第47巻の特集論文テーマ「(保育者あるいは保育者中心に…筆者ら注) 保育実践を振り返る」が設定されている。（日本保育学会編『日本保育学会会報』第138号，2007年，12ページ，参照。）
- 6) 横松友義「保育者の主体的な保育実践研究を推進する園文化創造アドバイザーに関する考察」『岡山大学大学院教育学研究科研究紀要』第139号，2008年，43-51ページ，参照。
- 7) 同上論文，50ページ。
- 8) この理解については、例えば、次の著書で述べられている。田中壮一郎監修 教育基本法研究会編著『逐条解説 改正教育基本法』第一法規，2007年。坂田仰『新教育基本法〈全文と解説〉』教育開発研究所，2007年。
- 9) 次の二つの文献を参照。E. H. エリクソン 仁科弥生訳『幼児期と社会 I』みすず書房，1977年。E. H. エリクソン/J. M. エリクソン 村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル，その完結〈増補版〉』みすず書房，2001年，179-202ページ。
- 10) 貝塚茂樹責任編集『世界の名著3 孔子論語 孟子孟子』中央公論社，1966年，74-76ページ，参照。
- 11) この点について、第一筆者・横松は、小川博久の考え方も引用しながら、論文「保育者の主体的な保育実践研究を推進する園文化創造アドバイザーに関する考察」（『岡山大学大学院教育学研究科研究紀要』第139号，2008年，45ページ）の中で、より詳しく論じている。
- 12) 若月芳浩「園の保育目標」森上史朗・柏女霊峰編『保育用語辞典 [第4版]』ミネルヴァ書房，2008年，148ページ。
- 13) 厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレーベル館，2008年，125-126ページ。
- 14) この部分について、第一筆者・横松は、すでに次の論文で考察している。横松友義・浅野泰昌・近行あさみ・姚金粧「これからの保育構造論構築に関する一考察」『岡山大学教育学部研究集録』

- 第136号，2007年，103-110ページ。
- 15) より詳しい内容は，渡邊祐三・横松友義「園史の振り返りをとおして保育士に生じる意識変化に関する考察」（『岡山大学附属教育実践総合センター紀要』第9号，2009年，14-15ページ）に述べられている。なお，一部文章表現を変えているところがある。
- 16) E. H. エリクソン 仁科弥生訳『幼児期と社会 I』みすず書房，1977年，参照。
- 17) 津守真『保育者の地平』ミネルヴァ書房，1997年，272-274ページ。
- 18) 貝塚茂樹責任編集『世界の名著3 孔子論語 孟子孟子』中央公論社，1966年，74-76ページ，参照。
- 19) E. H. エリクソン／J. M. エリクソン 村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル，その完結（増補版）』みすず書房，2001年，179-202ページ，参照。